

禁断の書 下

ナイトランナーV

リン・フルエリン

訳／浜名那奈

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

THE NIGHTRUNNER SERIES:
THE WHITE ROAD (#5)

by

LYNN FLEWELLING

Copyright ©2010 by Lynn Flewelling

Japanese translation rights arranged with
Lynn Flewelling, c/o The Knight Agency
through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo.

Japanese edition ©2013 by Chuokoron-Shinsha, Inc.

口絵・挿画 由貴海里
地図 平面惑星

 目 次

第二十章	毘の餌	9
第二十一章	夜の音	13
第二十二章	急展開	21
第二十三章	招かれざる仲間	60
第二十四章	死んだ男の屋敷に戻る	83
第二十五章	複雑な感情	96
第二十六章	偵察	120
第二十七章	闇にまぎれて	127
第二十八章	名所見物	135
第二十九章	再会	143
第三十章	海辺の小屋	172
第三十一章	《緑の貴婦人号》	187
第三十二章	集うレサノイ	191
第三十三章	厳しい選択	198
第三十四章	不信	207
第三十五章	別れ	232
第三十六章	闇の中のリーミニ	238
	訳者あとがき	250

登場人物紹介

サージル

故郷から追放されたオーリン
フェイの青年。アレクと共に
密偵として働く

セブラーン

アレクの血等から生まれた。
癒しの力を持つ

アレク

ハザドリールフェイと人間の間
に生まれた青年。サージルに命
を救われた過去がある。密偵と
してスカラのために働く



 禁断の書 下
ナイトランナーV



第二十章 罌の餌

ヴィアリーズでは、不安定だった天候が穏やかなものに変わった。湿った空気のおかげで、ウーラン・イ・サデイルの肺は若干楽になったが、病気はゆっくりと彼を蝕^{むしは}んでいる。行動するときにきた。

ウーランはイラーと庭園にいたときに、話を持ち出した。

木陰の長椅子に並んで座りながら、イラーは目を閉じて顔を上げ、午後の日差しをぬくもりを楽しんでいた。

「そなたに尋^{たず}ねたいことがあるのだが」ウーランは



イラーの注意を引くために、彼の手を取った。イラーは以前に比べればかなり回復していたが、完全に回復しているとは言えない。今でもまだ瘦^やせており、ウーラン以外の人々に対して、非常に内気なのだ。相変わらず悪夢にうなされており、起きているときも時々放心してしまう。それでも、役に立つのは間違いないかった。

「教えておくれ、坊や」ウーランは相手の注意をきちんと引いているかどうか反応をうかがいながら、甘言^{かんげん}を弄^{ろう}した。「そなたはここで幸せかね？」

「あなたはとても優しくしてくださいます。このご恩をどうお返しできるのかわかりません」

「そうか。実は、そなたにやつてもらいたい、大切なことがあるのだ」

「何なりと！」イラーが大声で言う。「あなたのためでしたら、何なりといたします、族長」

「本心ならありがたい、ケーニア」ウーランは常にイラーを偽名ぎめいで呼ぶよう、注意を払ってきた。特に、他の誰かに聞かれる可能性のある場所では。庭師が数人、庭園に入ってきた。イラーが彼らの姿を認めて、落ち着きをなくす。

ウーランはさらにイラーに身を寄せて、穏やかに言った。「そなたにやつてほしいことはな、ケーニア、わしと一緒にリーガに行くことなのだ」

イラーは死人のように蒼白そうはくになり、ハシバミ色の瞳ひとみが恐怖に満ちたが、それでも断らなかつた。

いい傾向だと喜びながら、ウーランはケーニアの手を軽く叩たたいた。「一緒に行こう。シャリス・ヤコ

ビンの未亡人を訪ねるのだ。ミールン殿にはすでに手紙で知らせてある。仕事でリーガに行くので、亡くなられたご主人に哀悼あいとうの意を捧ささげたいとな。今日、返事を受け取った」そう言つて、イラーに手紙を見せる。上等の子山羊皮紙に紫色のインクで書かれたもので、薄い緑色の蜜蠟みつろうで封をしてあつた。「招待状だ。もつとも、ミールン殿はご主人とわしが厚い友情で結ばれていたわけでもなかつたので、驚かされたであろうな。だが、わしはお子方にちよつとした贈り物を持つて行つておつたから、奥方はよくよく考えて、わしの訪問を許してくださいさつたようだ。そなたも一緒に来ておくれ」

イラーは全身を震わせ、同じように震える声でささやいた。「ですが、奥様にはわたしがわかつてしまいます。また売られて、拷問ごうもんされる！」

「なに、そなたは顔を奴隷どれいのヴェールで隠し、オーリンネンの服を着ればよい。髪を短く切つて、わしが解放してやったヴィアリーズ出身の奴隷だと言う

のだ。口が利けないことにしておけば、声でそなたとわかることもない」

「ですが——ですが、なぜ？」

「わしは是が非でも本を手に入れねばならぬからだ、ケーニア」

イラーが無表情になる。「本？」

「そなたのイルバンが小さい天幕に置いていた本だ」ウーランは辛抱強く言い聞かせた。一瞬、イラーには思い出せないのではないか、あるいは本の存在自体、気の触れたイラーの作りにすぎなかったのではないかと、恐怖がよぎる。だが、イラーの目の焦点が合ってきて、うなずいた。「そうか、あの本ですね」

「どれがその本か、そなたに教えてもらう必要があるのだ」

「そんなの無理です！ イルバンが何とおっしゃるか！ またわたしを鞭で打ちになつて——」

「落ち着きなさい、坊や」恐怖が再びイラーの脆い

心を崩壊させた。「そなたの主人は死んだのだ、そうであろう？ 彼が死んで平原に倒れているのを見たではないか」

「ああ——ああ、そうでした。それでも、それは許されないことです！」

「何でもしてくれると申したではな——」咳の発作が襲ってきた。今日はいつになく調子がいいと思っていたのに。身体を二つに折ってハンカチを口に当て、ゼーゼーと音をたてて呼吸するウーランの背中を、イラーが不安そうに軽く叩く。「ありがとう、坊や。もう大丈夫だ」どうにかしゃべれるようになると、ウーランはすかさず言った。「わしが言いたかったのは、そなたは一度ならず、わしのために何かしたいと申してくれておったということだ」

イラーは肩を落とし、卑屈に戻ってしまった。「もちろんです。はい。この命に代えましても」

「命をかける必要はない。まず、そなたには本がまだ同じ場所にあるかどうか見てほしい。もしあれば、

我々が退出する直前に、本を持ち去るのだ。紛失が露見したときには、わしらは遠く離れた場所にいて、すっかり安全というわけだ」

「いつ行くのでしょうか？」

「天候が良くなり次第、すぐに行こう。それに、これはそなたの友、サージルにもう一度会う機会でもあるのだよ。わしはアレクを手に入れねばならんでな」

サージルの名を聞くといつもそうであるように、イラーの様子が一変した。恐怖が希望に——そしておそらく欲望にも——取って代わられる。

いい傾向だとウーランは思った。節々が痛むのとはかく、長生きはするものだ。大方の人々の考えがあまりにもわかりやすいので、どうすれば上手く扱えるのか、手に取るようにわかる。この希望を目の前にぶら下げておくかぎり、イラーはどんな頼みでも聞くだろう。

その晩、部屋で一人になったイラーは眠れなかった。ウーランと一緒にサージルを探す。サージルにまた会えるのだ！ その希望と共に、欲望が頭をもたげる。以前のようにサージルを捕らえて奴隷にし、我がものとすることを夢想したのは、これが初めてではない。それが叶いそうになる夢を何度も見たが、いつもあと一步のところで手が届かないのだった。

夢の中で、イラーは虚しくサージルを追いかけて、叫び、説得しようとした……だが、何をどう説得するつもりなのか、イラーにもはっきりとわかってはいないのだ。後悔していることか？ 自分がいかにサージルをもう一度見たいか、彼にもう一度触れたいかということか？ ときどき、イラーは単純にサージルと仲良くなりたい——四十数年前のときと違って、純粋な気持ちから友達になりたいという願望に押し潰されそうになった。

眠れないまま、イラーはあえて希望をもたないよう努めた。



第二十一章 夜の音

三人とも、昨日から何者かに見られていると感じていたが、それを口にすることはなかった。昨夜は訪問者こそいなかったものの、アレクは今朝出立した直後、左側の崖の上に人影がちらりと見えたと確信していた。人家をはじめ、未だに人の住んでいる形跡はないが、見られているという感覚が消えることはなかった。

今のところ天気は良かったが、目下の目標である峠には黒雲と霧が重く垂れ込めており、その足場が凍っているのは間違いなかった。



「晴れるまで待つか？」サージルが提案する。

マイカムが空模様を調べた。「行けるところまで行ってみよう。できれば早く峠を越えたい」

「待って。これを見てください」アレクがセブラーの髪をひと房つかんで掲げる。黒く変えてもらった髪の色が再び消えてきており、汚らしい灰色に銀が交じっていた。「まだです。前よりも早い」

サージルが馬上から身を乗り出して、セブラーの髪の毛をうなじから持ち上げた。「肌も部分的に白くなっている。くそっ！」

「どうする？」マイカムが尋ねる。「マガアナにも
らった伝言杖で、セロに連絡を取るか？」

「それでどうなる？」サージルが言った。「セロが
もし来られたとしても、ここに着くまで何日もかか
る。一か八か、やってみるしかない」

「何をです？」アレクが尋ねる。

「セロが首を突っ込んでくる前にできることを、だ。
新手の病気か何か、もつともらしい言い訳を考えて、
先に進もう」

イーブラドスは遅れを取り戻すべく、無理に馬を
押し進め、目標との距離を縮めようとした。山中の
小道に入ると、道はさらに険しくなったが、わき道
はなさそうで、あとをつけるのはたやすくなくなった。
この道がどこに続いているかはわからないが、一本
道なのは確かだ。偵察に出した隊員たちは、辺りに
人の住んでいる気配はないが、道からそう離れてい
ない場所に小さな廃村があったと知らせてきた。小

さな谷に出ても、馬も家畜も畑も見かけなかった。
ところどころ道に残っている曲がった蹄の跡から
判断して、彼らは獲物にかなり近づいていた。

小道に入って二日目の晩、ノーウエンが野営の跡
を見つけた。人の足跡や寝袋の跡が、雪の上にはっ
きりと残っている。地面を掘った煤まみれの炉に残
っている灰は、一日か二日前のものだ。

周辺を探ると、リーザーは敵が用足しに使った場
所や、ウサギの皮や内臓を捨てた場所を見つけた。

「例の混血が射て、連中に食わせてやっているんで
しょうか？」レインが地面にしゃがみ、ウサギの頭
蓋骨を数えながら尋ねた。「少なくとも、奴はタヤ
ンジルを生む以外にも優れた点があるようですね」
「他にも優れた点があるらしいぞ」テイギルがニヤ
ニヤ笑いながら言った。「奴らの寝袋の跡を調べま
した。二人が一緒に眠り、もう一人が少し離れた場
所に寝ています。それから、こちらを見てくださ

「テイギルはリーザーたちを雪に残された足跡のところまで連れて行つた。三人のうち一人が、おそらくは薪まきを取るために、二人から離れている。」足跡の深さから、こいつが一番大きい奴——人間ディアフエイだとわかります。一人で寝ているのはこいつではないかと」

「戦いになったら、使える情報だな」リーザーが言う。

炉の跡に戻ると、レインが言った。「見てください！」前かがみになり、灰色の縞しまがある長くて白い羽を拾い上げる。「昨夜見かけたやつと同じ、白いフクロウの羽です」

リーザーはその羽をちらりと見下ろした。「切り方次第では、いいペンになるかもしれない」

「それは《母なる神》の鳥じゃ」ターメイが少年に言う。「大事に取っておけば、幸運をもたらしてくれるであろう」

「これは？」ソーナが炉のわきにしゃがんで言った。

ひとりの髪を掲げて見せる。その髪は黒く、端が焦がっていた。

「奴らが髪を切ったんでしょ」ノーウェンが言う。

「それがどうしたの？」

「そうじゃありません。匂いを嗅かいでください、隊長」

リーザーはその髪を受け取り、匂いを嗅いだ。花のような、かすかに甘い匂いと、リーザーには感じたことのない魔法の臭いがした。黒い髪に交じって、わずかに銀髪もある。「奴らはこれを隠そうとしているが、上手くいっていないということだ」

夜の帳とばりが下りると、彼らは大きな火を燃やしてその周りに立ち、ノーウェンが強弓で射た鹿の肉の残りや、数日前に農場から盗んだカブの薄切りを食べた。

ターメイは食べ終えると火のそばに敷いた寝袋にあぐらをかき、魔笛オウルを吹きはじめた。隊員たちはその風変わりな音楽に慣れてきていた。リーザーでさ

え、このまじない師が次にどのような変わった音色を奏^{かな}でるか、期待するようになっていた。

そのせいで注意が散漫になっていたのだろう、背の低い男たちが六人、光の輪の中に入ってくるまで、リーザーは全く気づかなかった。最初に頭をよぎったのは、男たちが武装していないという事実だった。次に思ったのは、男たちの一人がターメイのオールと非常によく似たものを持つており、その男の顔と手にも、ターメイのときよく似た、まじない師のしるしがあるということだった。男たちは動物の歯で飾った、ゆったりした革のチュニツクを着ており、黒い髪はターメイより長く、ボサボサしている。

ターメイが驚いたように立ち上がり、オールを持つた男に頭を下げた。

その男もお辞儀を返し、レサノイ語にかなりよく似た響きの言葉を発した。リーザーにはわからなかったが、正真正銘^{しょうめい}のレサノイ語だったに違いない。ターメイがほほ笑み、発音の難しい同じ言語で返事

をした。二人はしばらく話し合い、互いのオールを調べたが、ようやくターメイが通訳をはじめた。

「彼らはレサノイじゃ！」ターメイは顔中に笑みを広げて言った。「彼らの祖先は海から追い出された後、この山地に留まったのだ。こちらはナバ、彼らのまじない師で、わしが来ることを知っておった」

ナバと紹介されたまじない師が、リーザーにオールを掲げてみせる。ターメイのものと同じように、彩色や彫刻による模様がいくつかの輪になって笛を飾っており、黒い手形も押されていたが、手形の場合がターメイのものとは異なっていた。

「この手形が輪にどのようにかかっているかが、そのまじない師のすべきことを物語っておるのじゃ」ターメイが説明した。「わしのは、わしが長旅をする^とと告げておった。ナバのは、よそ者ではないよそ者に出会^とうと告げておったのじゃ。ナバはそれがわしだと言うておる。遠くから来た同胞^{どうほう}だと」

「彼らは我らに何を望んでいるのだ？」ターメイは

喜んでいたが、リーザーは疑いを拭いきれなかった。

「彼らはわしの演奏を聴いて、わしに会いに下りてきたんじゃない。お主らに興味はない。お主らのタヤンジルを除いてはな。ハザドリーエンは彼らが見た二人目のタヤンジルじゃ」

「他にも見たのか？」

「白き子どもを連れた三人の男たちがこの道を馬で通るのを見たらしい。もつとも、子どもはお主らのタヤンジルと同じように、魔法で姿をごまかしておったそうじゃが。ハザドリーエンは彼らにとっては《白き男》じゃ」

ターメイは再びナバと話をし、リーザーをふり返った。「ナバは、その子どもは悪しきモノだと言っておる。ナバは非常に強力なまじない師だが、彼でさえその子どもには近寄らなかつた。きやつらは全員血の臭いがして、子どもも血の臭いがしたそうじや。お主らのタヤンジルは殺しの臭いがせず、ナバはそれを喜んでゐる。わしがお主らと一緒にゐる故

にな。もしわしにもその臭いがしたら、わしらを攻撃しておったそうじゃ」

「そうでなくて幸運だった」リーザーはこれまで何度も、レサノイのまじない師は魔法で人を殺せるのか疑問に思っていた。他にも男たちがいるのではないかと、周囲に目を走らせる。闇の中に他のまじない師が何人隠れているか、わかつたものではない。「奴らを見たのがいつのことか、彼に訊いてくれ」

ターメイがナバと話をする。「二日前だ」

「札を伝えてくれ。それから、彼らに我らと食事を共にしないか尋ねてくれ」

その申し出は受け入れられ、レサノイたちはお返しに食べ物の入った小袋を差し出してきた。フェイたちは経験上、レサノイからの贈り物を拒むと深刻な事態を引き起こすと知っていたので、予想外の客人たちからもらった硬い実を噛み砕いたり、脂が変質して嫌な臭いのする乾燥肉をかじったりと、できるかぎりのことをした。

食事を終えると、ターメイとナバは共にオールーを吹いた。心臓の鼓動のような、フクロウの鳴き声のような、ミツバチの羽音のような低音が尾根にこだまし、小さな谷をえも言われぬ神秘的な反響音で満たす。

「我々の追っている連中がこれを聞いてたらどうします？」カーリエンが尋ねた。「山中では音は遠くまで運ばれます」

リーザーは闇をじっと見つめてから、彼にしては珍しく、かすかな笑みを浮かべた。「聞かせてやれ」
 レインがリーザーの隣に座り、フクロウの羽を指先でくるくる回す。「どうして割れないんですよう？」

「何が割れないだと？」リーザーが尋ねる。

「彼らの笛です。《ヤシエルのベラン》は多くの叔母^おなんです。それで教えてくれたんですけど、まじない師は自身の運命が笛に記^{しる}されていて——あの黒い手形と飾り帯のことです——それが成就^{じょうじゅ}すると、

笛が割れるんだそうです。ナバはターメイに会ったのに、笛が割れていません。ほら、笛の音はどれもおかしくありませんから」

リーザーは常からある程度オールーに興味をもっていたが、いつも以上に注意して二人のオールーを見た。「あの手形が触れている模様はいくつもある。おそらく、成就しなければならぬ運命はひとつではないのだろう」

「そうか。たぶん、そうなんでしょう。帰ったら、叔母に訊いてみます」

「どうしてターメイに訊かないの？」ノーウエンが尋ねる。

まじない師が演奏をやめた。「リーザーは正しい。運命は多くの糸を撚^より合わせたものだ」そう言うと、ターメイは再び風変わりな曲の演奏に戻った。

セブラーンに血を飲ませていたアレクが顔をあげた。「ビレイリーの名にかけて、あれは何です？」

「わからないな」サージルが、山頂のむき出しの岩肌に寝袋を広げていた手を止める。遠くから、これまでに聞いたことのないような音がかすかに聞こえてくる。

彼らは日没時に道の一番高い場所に着き、冷たい霧に包まれて凍えながら、火を焚かずに野営しなければならなかった。昇ってきた月が銀色に輝き、その光で数メートル先まで見えるようになった。

霧はただならぬほど冷たく、毛織の服を突き抜けて肌をじつとり湿らせる。サージルが齒をガチガチ鳴らし、一緒に毛布をかぶって温め合おうとアレクに提案しかけたとき、この世のものとも思えない音が夜風に乗って漂^{ただよ}ってきたのだ。寒さを忘れ、高くなり低くなりするその音を聞きながら、サージルは困惑した。

「あんな音をたてる動物はいない」マイカムが言う。
「竜はどうだ？」

「竜もだ」サージルはセブリーンをちらりとふり返

った。セブリーンはアレクの隣に座っており、この音に動じる様子はまるでない。「それに、もしこれが竜なら、あの日オーリンネンでそうだったように、こいつが興奮するはずだ」

「ともかく、近くはないな」マイカムはしばらくその音に聞き入った。「山の中では、音源を判断しづらい」

「何の音か、わかればいいんだが！」サージルがつぶやく。

奇妙な音は続き、峠にそよ風が吹くたびに高くなったり低くなったりしている。

「移動しているようには聞こえませんか」アレクが言った。

「移動していないなら、こちらとは距離を保っているわけだから、いいことだろうな」マイカムが言う。
「お前たちは少し寝ろ。オレが最初の見張りを引き受ける」

「すまない」サージルは剣をベルトから外したが、

それを手元に置き、ブーツを履いたまま、湿った毛織の毛布を何枚も重ねた下に丸くなった。身体が若干温まり、空を見上げる。もつとも、霧のせいで空までは見えなかったが。どこまでも続く霧と、おぼろな月だけが見える。

そして、他に見えるのは、セブラーンの黒髪に交じっている、月光色の髪の毛だけだった。

ターメイは少しの間、オールを下げた。彼とナバは知っている《歌》を交互に吹き合い、同盟の協定を結んだが、それにオーリンフェイたちは含まれていなかった。ナバは、ターメイがタヤンジルの仲間と一緒にいることを心配していた。ターメイは語りの歌をはじめから終わりまですべて演奏して、ここにいるタヤンジルになせる善きことを、幻視として相手の心に送り込んだ。《母なる神》は、この手のタヤンジルを許容なさったのだ。もしそうでなければ、レサノイとハザドリールフェイがこれほど長

く共存することはなかっただろう。だが、例の小さきタヤンジルは？ それは別の問題であり、ナバはすでにそのことを理解している。

ターメイは演奏を再開し、《歌》に祈りを織り込んだ。(感謝いたします、《偉大なる母》よ。あなたはここまでの長き道をわしにお示しくださり、遠く離れたレサノイのもとに導いてくださった。今こそ、あなた様の構想がわしにもわかりましてございます。あなた様のご意志のために、このわしに次の糸を紡ぎ出させてください)

新しい強力な《歌》の最初の音が、ターメイの心の中ですでにできあがりつつあった。《母なる神》がターメイと分かち合うために、この《歌》を送って寄こされたのだ。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。